

唐

詩

選

(上)

前野直彬注解



岩波文庫

とう し せん
唐 詩 選(上) [全3冊]

1961年 5 月 5 日 第 1 刷発行 ©

1991年 11 月 12 日 第 44 刷発行

注 解 者 まえ の なお あき
前 野 直 彬

発 行 者 安 江 良 介

〒101-02 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 株式会社 岩 波 書 店

電話 03-3265-4111(案内)

定価はカバーに表示してあります

印刷・精興社
製本・永井製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN4-00-320091-8

岩 波 文 庫

32-009-1

唐 詩 選

(上)

前野直彬注解



岩 波 書 店

解題

書物はそれぞれの運命を持つ。ことを中国の歴史に限って見ても、昔から多くの著者が心血をそそいで書きあげた書物の中には、もはやその断片すら残さずに消滅したものがあるといふのに、実は氏素姓うじすじょうもあまりさだかではないこの「唐詩選」が、現代に至ってもなお新しい版をかさねようとは、編者としてその名を記録された李攀竜りはんりょうの思いもよらぬことであつたに違いない。

李攀竜（一五一四—一五七〇）、字は于鱗あぎなうりん、号は滄溟そうめい、山東省済南さいなんの人。明代中期以降の文壇を風靡ふうびし、そして明末以後には悪罵のうちに葬り去られた文学者である。

中国の詩の歴史は、王維おうい・李白りはく・杜甫とほ・白居易はくきよいなどを生んだ唐代に一つの頂点へと到達し、次の宋代の詩人たちはこの成果を継承しながら、新しい展開を試みた。その場合、唐のどの時代、どの作家の作風を継承するかは、宋の詩人たちの間にも差が生ずる。だが結局のところ、宋代の詩に共通した性格としてひとくちに言うことができるのは、李白や杜甫の詩に見るスケールの大ささ、高揚した、または沈痛な感情の表白、そしてそれゆえに生ずる大味おおあじなおもむきや一種の泥臭さとは違ったものであつた。宋詩の世界はもっと静澄であり、きめがこまかく、感情の小さなひだまでも写しとめようとするかわりには、とかく散文的な、平板な方向へと流れやすい。

したがって宋代のあとを継ぐ元・明の詩人たちにとっては、詩の理想的な姿を唐・宋のどちらに求めるかが、自分の詩風を決定する大きな契機となる。そして李白・杜甫を含むいわゆる「盛

「唐詩」を理想とする主張は、すでに南宋末の嚴羽の「滄浪詩話」にあらわれてはいるものの、詩壇の大勢を占めるだけの力はなかった。ところが明代にはいると、大体は宋詩派が優勢な中で、高啓（青邱）のように盛唐詩を学ぶ詩人が登場し、また高棟は唐詩の選集である「唐詩品彙」を編集して、唐詩の歴史が初唐から盛唐へと登りつめ、中・晩唐は下降の時代であると評価した。そのあとを継いで李夢陽・何景明など七人の文学者（これを前七子と呼ぶ）が盛唐詩を宣伝し、大きな勢力を持ったのだが、彼らの死後、ふたたびその主張をくりかえして詩壇をほとんど盛唐詩一色に塗りつぶしてしまったのが、李攀竜・王世貞を首領とする七人（これを嘉靖七子または後七子と呼ぶ）であった。

しかし、ただ盛唐詩を宣伝するだけならば、なにもそう珍しいことではない。前・後七子の主張のきわだった特色は、詩の価値を決定するものはその「格調」だと割りきったところにある。格調という言葉は日本語に翻訳しにくいが、これに対立する「性霊」が詩人の精神・情趣・発想などをいうのに対して、詩の形式的な面をさすものであり、詩形・リズム・修辭などを含む。彼らの主張によれば、一時代の詩にはその「格調」があり、格調の最も高いものが盛唐の詩だと言うのである。

古い中国の詩論は、詩の評価をさだめるだけのものではない。それは自分の詩作に基準を与えるものである。だから詩は格調が大切だという主張は、要するに詩を作るとき、格調を勉強すればよいということになる。そして格調を勉強するためには、ちやうど書を学ぶ人が手本をしきうつしにするように、手本とする詩、すなわち盛唐の詩を忠実に真似すればよいというのが、前・

後七子の理論の一つの支柱であった。これはまた、詩ばかりには限られない。散文についても同様に、秦・漢の文章を理想的な格調を持つものと認め、作家はその模倣に力をそそげと教えている。こうして前・後七子とその一派の文学者たちは、格調派・古文辞派・擬古派・模擬派などと呼ばれた。この一派の主張は、都市経済の発展につれて詩作を学ぼうとする人の数が増大しつつあった当時の風潮に、うまく適合するものだったらしい。むつかしい理屈をぬきにして、ただ盛唐の詩を真似しさえすれば、一人前の詩人になれると保証してくれるものだからである。こうして明の中期以後、李攀竜一派は完全に詩壇を制圧したのであった。

その李攀竜は五十七歳で世を去ったが、彼の名がまだ人々の記憶から消えない明末のころに、李攀竜編と銘打った「唐詩選」が世にあらわれた。そして作者の盛名を負って、広い読者層を持った。

唐詩選は五言古詩十四首・七言古詩三十二首・五言律詩六十七首・五言排律四十首・七言律詩七十三首・五言絶句七十四首・七言絶句百六十五首、合計四百六十五首を選んだ。作家の数は全部で百二十八人、最も多く作品を選ばれたのは杜甫の五十一首を筆頭に、李白三十三首、王维三十一首、岑参二十八首と、李攀竜の主張通り盛唐詩に重点がおかれ、中・晩唐詩については、韓愈が一首、白居易は零、李商隠が三首、杜牧は零というように、極端な冷遇が与えられている。選ばれた詩の内容も、宋詩には欠けた、雄渾なしらべを持つものが多い。

これこそ前・後七子によって示された、理想的な詩の精華を要約してくれたものと、当時の人は考えたに違いない。だからこの本は、唐詩の選集というだけでなしに、李攀竜の詩論を具体

的に示すものであり、詩作の手本でもあった。その記憶だけは後世にも伝わって、前・後七子の理論が全く没落した清の乾隆年間けんりゅうになっても、寺子屋の教科書には唐詩選がさかんに使われていたという。

しかし李攀竜たちの主張は、唐詩選が世に出た明末から清代初期へかけて、しだいに鋭い非難をあびるようになった。詩において第一に必要なのは形式ではなくて作者の精神である、摸倣によってすぐれた文学は作れないという、当然の主張が次々とおこってきて、李攀竜は文学を墮落させた張本人のようにのしられる結果となったのである。

そして大きな権威を持たされた。唐詩選にも、疑惑の目が向けられた。そこで唱え出されたのはこの本が李攀竜の編ではなく、彼の名をかたった真赤なニセモノだという説である。それを初めて言いだしたのは、清の乾隆年間に勅撰された「四庫提要」であろう。それには、李攀竜に関する資料のうちに、彼が歴代の詩を選んで「古今詩刪ここんしきん」を作ったことが見えるところから、彼の死後、どこかの出版社が古今詩刪の唐の部分から一部を抜き取り、李攀竜の文集の中にある「選唐詩序」を「唐詩選序」と書き直して巻頭につけ、いかにも李攀竜の編集らしく見せかけてひともうけをたくらんだのであると述べている。これに対しては平野彦次郎「李于鱗唐詩選は偽作なりや」(昭和七年、《支那学研究》第二編)が四庫提要の説の誤りをこまかに論証して、唐詩選はほんとうに李攀竜の編だとする説を提出した。これによって提要の誤りは確認されたが、唐詩選が偽書でないとする決定的な証拠はそこでも発見されておらず、この問題は現在に至るまでまだ結論が得られていない。

私の意見を述べるならば、唐詩選はやはり偽書だと思う。ただし提要の言うように、古今詩刪から詩を抜き取って唐詩選が作られたのではないし、またこの書は偽書であるにもせよ、李攀竜の詩論に忠実に従ったものには相違ない。以下、それらの点について私の見解のあらましを説明しよう。

唐詩選を李攀竜の編ではなかうと考えるのは、彼が唐詩選を編集したという記録は、これほど有名な書物であるにもかかわらず、一つも発見できないからである。ただし彼が若いころ、唐詩の選集を作ろうとしたことはあったらしい。唐詩選巻頭の選唐詩序は、彼の若いころ（といっても四十五歳以前だが）の作と考えられるからである。（この序文は次に訳出するが、彼一流のおそろしく威勢のよい議論で、格調説の立場にもとづきながら、唐の詩人全部にケチをつけている。しかしケチをつけながらも、彼はやはり盛唐の詩人たちを理想と仰いでいるのである。）

そのときに彼が選んだ唐詩の集は、今では伝わらない。晩年に完成した古今詩刪の唐の部に吸収されてしまったのかと思われる。平野氏は唐詩選を偽書にあらずとするかわりに、古今詩刪の方をニセモノではないかと疑っているが、そう判定すべき客観的な根拠には乏しい。古今詩刪は今でも伝わっているが、これは李攀竜の死ぬ数年前に完成したもので、同志の王世貞の序文をつけて刊行された。上古から唐までの詩を選び、次の宋・金・元は完全に黙殺して、唐詩の次に明詩をおくという、思いきった編集をした書である。

ところが、古今詩刪と唐詩選とを比べて見ると、また多少の異同がある。古今詩刪の唐の部は七百四十二首の詩をおさめており、それをダイジェストして唐詩選を作ったというのは、たしか

にありそうに見えるが、実は唐詩選にだけあって古今詩刪にはない詩が、二十三首も数えられるのである。

この二十三首がどこからまぎれこんできたのか、唐詩選が利益をねらった本屋の編ならば、編集に手間をかけるはずはない。必ず何か既成の詩集から詩を抜きとってきて作ったに相違ないのである。

唐詩選が詩を選ぶのにもとづいた詩集は、明の高棟の「唐詩品彙」であった。こまかい考証は省略するが、古今詩刪も同じく唐詩品彙によっているものの、唐詩選の方が唐詩品彙にいつそう忠実である。したがって唐詩選も古今詩刪とともに唐詩品彙を底本としているのであり、そのいづれをニセモノと判定するかは、簡単には定めかねるのが現状である。この問題を解くためには唐詩選と古今詩刪とを綿密に対校しなければならぬのであって、そのこまかい点まではここに記すことができないが、調べれば調べるほどさまざまな問題が出てきて、判定はさらにむづかしくなる。

唐詩選が李攀竜の名をかたったものであるとして、唐詩品彙から詩を抜きだして唐詩選を作ったのは誰か、これも確定はしかねることだが、ただ私の調べた限りでは、唐詩選の古い版本はすべて蔣一葵という人の注釈をつけたものばかりで、それより前の印刷はない。かつ日本で最初に唐詩選を刊行した服部南郭も唐詩選の原本は「蔣注を以て行わる」と書いているので、南郭もそれ以上に古い本は見えていなかったわけである。唐詩選にはその蔣一葵の跋があるが、これは万曆二十一年（一五九三）に書かれた。この蔣一葵という人物が、李攀竜の名をかたったのでないに

ても、何かの鍵を握っているであろう。

このように唐詩選は、本国では格調派の没落とともに見捨てられ、寺子屋の教科書にまで「下落」してしまったのだが、日本においてはまた違った評価を受けた。その原因を作ったのは江戸の儒者荻生徂徠（一六六二—一七二八）で、前・後七子の文学理論をいち早く輸入し、李攀竜・王世貞こそ当代随一の文学者だと宣伝した。そして弟子の服部南郭（一六八三—一七五九）が唐詩選に訓点をつけて出版し、門人に詩を教える際の教科書としてから、中国における以上の大流行を見たのである。のちにはこの本が偽書であることを指摘して、徂徠や南郭の不明を攻撃する学者・詩人もあらわれたが、この本の流行に大きな影響を及ぼすには至らなかった。

唐詩選という本は、偽書であるにしても、李攀竜の詩論にそった選集のダイジェスト版である。だが彼の詩論は、今のわれわれにとって文学史的な意義以上のものを、おそらく持ち得ないであろう。それよりもむしろ、唐詩の最も簡便な選集としての価値を重視しなければならぬ。たしかにこれは、李攀竜ごのみの偏向を持った選集には違いない。懐古・送別・旅愁の詩ばかり選びすぎたとは、昔から言われている批判である。唐詩の持つ他の一面、たとえば白居易の社会詩などは、全く無視されてしまった。

しかし考えてみれば、唐詩のあらゆる傾向に対して完全に公平な選集が、はたして作れるものかどうか。作れたとして、こんなに手軽な形になるものかどうか。しかもこの本におさめられた唐詩の一面は、その最も重要な一面である。この本は唐詩のすべての傑作を網羅したものではない。だがそれを承知の上で読むならば、唐詩、ひいては中国の詩への入門書の役割を、この本は

十分にはたしてくれるであらう。

だから唐詩選を読んで唐詩の世界に興味を動かされた読者は、唐詩の他の選集や、各詩人の詩集などを通して、さらに広く唐詩の精華にふれていただきたい。そのためには、吉川幸次郎・三好達治「新唐詩選」(一九五二年刊・岩波新書)、吉川幸次郎・桑原武夫「新唐詩選続篇」(一九五四年刊・同)、高木正一「唐詩選」(一九五五年刊・朝日中国古典選)、および岩波書店刊「中国詩人選集」がよい参考になることと思う。

また唐詩選自身についても、すでに数多くの注釈が出版されている。中国人のものよりも、むしろ日本人の注釈の方に参考となるものが多いのだが、とうていここに全部をあげるわけにはゆかない。この注釈を作るにあたって、特に参考としたのは、入江忠圀「唐詩句解」・服部南郭「唐詩選国字解」・千葉芸閣「唐詩選掌故」・戸崎淡園「唐詩選箋注」・宇野成之「唐詩選弁蒙」・森槐南「唐詩選評釈」などである。

以上の諸注釈が調査やその比較検討など、この注解を作る準備には、石川忠久・伊藤虎丸・大野勉・神谷い子・佐藤保・高橋稔・中島敏夫・西岡晴彦・溝口雄三・山之内正彦・横山伊勢雄の諸君の力を借りた点が多い。ここにあつくお礼を申しあげる。

凡 例

一 この注解の底本には、一般に通行している唐詩選（その間でも多少の文字の異同はあるが）と、各詩人の詩集・清代に編集された「全唐詩」などを校合したものを用了。唐詩選とその他の詩集との間に相違があるときは、多く後者の方に従ったが、これは解題にも述べたように、唐詩選があてにできかねるテキストだからである。ただし相違する文字のどちらが正しいとも判定しかねる場合は、なるべく唐詩選の方を生かすようにした。

二 詩句の解釈について、解題にしるした諸注釈の間に相違があるときは、よほど無理な解釈でない限り、なるべく一々紹介することとした。ただそれらを比較した上、この注解が下した結論の根拠については、詳しくしるす余裕がないため、思いきって省略した点が多い。また実際、どちらにも解釈できるところや、日本語で説明するとひどく違うようだが、原文ではそう開きのないところで解釈が対立している場合も少なくないのである。

三 同じ言葉が二つ以上の詩にくりかえして出てくる場合、なるべくは煩をいとわずに一々説明をしるすこととした。しかし、あまりたびたび出る言葉はあとの方で説明を省略したり、長い説明をくりかえす必要のあるときには、前の頁を参照するように注記したところもある。

選唐詩序

李攀竜

唐代には、伝統的な五言古詩はなくなって、唐代独自の五言古詩が発生した。陳子昂ちんすじやうは自分の古詩を伝統的な古詩と考えているが、私は賛成しない。

七言古詩では、杜甫だけが初唐の風格をたもっているものの、格調を破った奔放なところがある。李白も奔放だが、いくら強い弓でも射程の尽きるところでは力がなくなるもので、同じようなことが彼の詩にも往々にしておこる。そこで時には間のまのびた句をはさんだりするが、これは英傑の士が凡俗の目をくらましているにすぎない。

だが五言・七言の絶句となると、李白はまったく唐代三百年間の第一人者である。それというのも、思いをこらさないために名詩が浮かんたのであろう。だから李白自身も氣のつかぬうちに至上の境地へと達したのであって、技巧をこらした作品はかえって失敗している。

五言律詩・五言排律には、どの詩人にもだいたい佳句が多い。

七言律詩は、どの詩人にも作りにくいものだが、王維と李頎りきは至妙の境地にまで、いくらか手がとどいている。杜甫でさえ、作品の数は多いが、雄健な力を失って、規格をはずれた勝手な方向へと流れてしまった。

このように、詩人たちはそれぞれに苦勞をしているのだが、天が才能のある人物を生む力は、まことに尽きぬものがある。だから後世に君子があらわれて、この選集によって唐詩を知り尽く

してくれたならば、唐詩のすべてはここに尽きたこととなるのだ。

唐詩選(上) 目次

卷一

五言古詩	二	後出塞	三
魏徵		玉華宮	三
述懷	三	王維	
張九齡		送別	四
感遇	六	常建	
陳子昂		西山	四
薊丘覽古	二	高適	
李白		宋中	七
子夜吳歌	三	岑參	
經下邳圯橋懷張子房	三	與高適薛礪同登慈恩寺浮圖	九
		韋應物	